



還
寘
紙
料

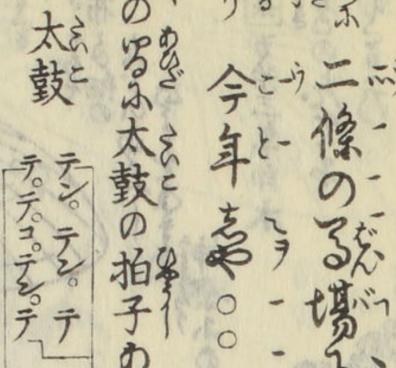
下

15
102
2止

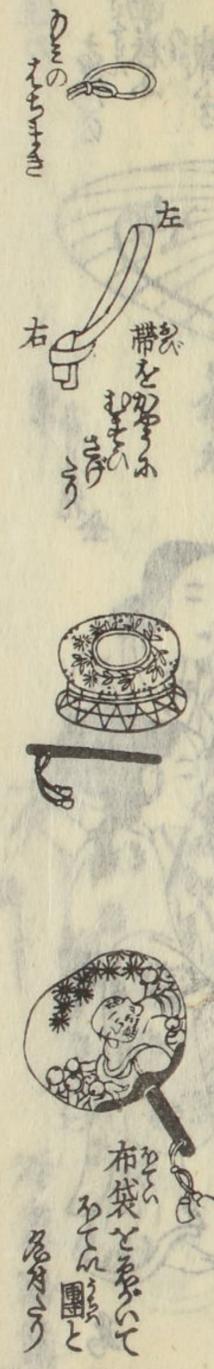


巾のめつせ毛琉乃帯には赤ちりめんのかん帯は赤白の尻切とさせ金の太鼓の塗
 撥物悉かのる日傘ぬ布袋の心す簿繪の團乳母かちやま古今かちりめん子やまふ
 きて横のく尻ぬ金入の帯ちりめんく地黒羽團の大模様の後入のかびり十四五
 ある小女郎に袴着ひききとかのきかきとゆかきとゆかのきとゆかきとゆかのきと
 の物りせし小町踊の門のくわかかあうも内(す)ひりて我の整人(の)娘(子)どりてあま
 とあし我主の子のそく小喰(を)喰(も)知(る)酒(き)を(ぬ)ゆ(び)飯(を)飯(を)の(の)冊(子)ぬ(も)日(傘)
 かつこい小女の踊(の)ま(の)ま(の)又(又)愚(案)問(答)寛(保)二(年)印(本)小(白)七(月)七(日)七(夕)と(あ)る(略)又(は)自(身)人
 の子(成)平(さ)太(鼓)を(持)美(く)け(さ)ひ(か)ざ(り)出(立)太(鼓)を(さ)き(小)あ(と)淫(ひ)歩(く)
 貴(娘)の子(十)四(五)一(十)七(八)ま(の)花(あ)る(盛)あ(る)を(羨)く(拵)の(せ)せ(嫁)櫻(り)と
 又(小)女(郎)あ(ん)其(方)限(相)應(そ)ま(く)小(日)傘(あ)ん(さ)か(け)せ(九)團(小)房(丸)付(子)
 くる(を)持(せ)ゆ(る)美(く)扇(あ)ど(め)て(ゆ)き(面)白(く)あ(を)う(さ)ひ(大)内(町)方(小)路(こ)と
 友(達)の(か)え(り)踊(と)り(け)り(む)り(り)小(町)と(り)お(人)毎(ふ)羨(人)の(中)小(あ)ひ(各)付(て)

小町踊といひ傳へり 其歌ふ
 二條のふる場ふらぐらふききかたにさぶけるぞ立きてゆひ
 今年志や○○○○こまてん志よ花の糸いたとほんぢよ
 小あつこの写ふ太鼓の拍子あり



かの如く小拍子とハッおて又おをうさひ出せおのうら地拍子佃道とゆふ太鼓の
 お様敷を五ッうはあり。テン。テン。テ。テ。テ。テ。五拍子あり。借又供の出るわひひく
 めて額小紅のすちまらんとさせ又襟とて女の帯を二おめて左の肩ふり右の裾乃
 下へ大様ふむまび下り



小町踊りの中
 二

雁鴎飛波集 寛永十五年撰
 前々 盆の法燈と花籠をさげし
 附々 欠小 漆 たるりや うちまき 尚良
 ○ごうりに帽子すまらまたとほひり
 御詣懐子 万治三年印本
 たいやうふやわがは出さし 令布
 たをなをうらふとひ画かひあふ
 ひんごころとしてしわのせで月を

頭お花を
 かしこ
 中古風俗志
 わのせ
 八千マキ
 紫 紅 萌黄



ちとを
 ちとを
 ちとを
 ちとを
 ちとを

正保の
 あらゆるの
 画巻ふ
 載る
 七夕踊
 の圖
 小町踊
 則是
 あり
 傘にほやま
 和布
 細の
 たごひあふ
 ぶくろ
 神祭ふり
 常辰
 幕際集 万治三年印本
 録
 わまの
 ちとを

日傘朱
 紅
 雙
 かり花
 金
 松蘿館藏
 為一摸



太鼓
 金銀
 わのひ
 朱
 撥ハ
 墨の
 えんを
 金粉
 ちとを

松蘿館藏
 為一摸

七月七日ハ牽牛織女天の川にて一夜安里をありたまふ其縁を引てむうハ娘のこども
 持する人も焼入と取結がまを引つ小も男く形勢出させ何かさじとささりかきりて
 踊らせり以上愚妄問答 是等いさまで古紙草紙小ものわらねど古老の説ゆりて祀
 めやふ小者どつるさちて前小摸る古画は合さま別た考と附まるふおふす
 愚問答ふり小町と小女の艶あるを讀るより出る名めては画則小町踊ある
 べへ入俳諧五節夕元禄元年 小踊の園々ゆく習歌かきり音頭のみき園あり大方彦
 とる男子女とも小踊又その女童部踊まは薄の大鼓塗撥とみ毎たさ深絹の袴巻
 帯と肩よりさげ袴びたせたと名はけ初の大踏と日傘さうりて踊とみ小池
 依きの門めて踊りまを小町とさうとのり」とあり帯を袴かきり夏愚問答ふて
 合せてるるべむうの女の帯幅三寸二寸半長六尺五寸五尺七寸と二代女ひらりと
 小町物語等ふんえさう。前の古画小袴とさるおすのふり幅三寸の帯あり又續江戸砂子
 享保元年 七月の條小町踊 十二三以下の小女帯。腰帶やうのものと襟ふうり袴と

園を敷くとて團のよくあるた敷めて拍子とさうて浪小踊ゆわらまたお集てのめ
 ゆかり」といふ又甲古風俗志 明和元年江戸住 小昔の七月六日はより小町踊との事
 を有りて七八歳ぶろの女子紅絹の羽金入おどめて袴巻とさせ下髪頭小造花を
 かさるるさき手袴とさうて達ある染りやうとさせ園を敷小房のははるさ
 持せ四五人をも召はわら町人の娘の肩車ゆ寄せ乳母抱守等はきそひて日傘を
 させそのわら太勢娘も供もと曳か血まわら今日のをさるりわら小娘のまわれ茶
 との小秋とさうひ歩り柳亭日延宝八年印本 俳諧江戸弁慶小九月尾あわらふのあわれ茶 山夕
 小小方のきえん今に傳り をひのけり止で衣裳を改てわくる供のあけ二三人連く歩りささり
 まね園を敷小鬼灯提燈里のさ相提燈小踊繪止消かど画さちやうちん喜あくる
 も止」といふささり享保中まで小町踊の名はあがら戸中たさくささりひた敷
 の拍子とさるのさめて踊りの絶あらんちく 奥村政信が法本小町とさるの圖あり風俗志 俗俳諧
 乃書ゆ貞徳徳の徳 の發句とさる小町踊のさ敷ささりてめささりうらねお出

我衣 古老開書 雙尾庵藏 小天和年中菓子店の香板小仙臺糞と大所流小書より

不三いと讀里又 **ろ** 如此あるものり俗小の道明寺より元禄のはより鳥二三羽

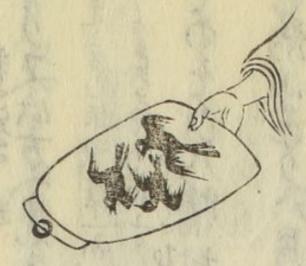
画き本字と矢の後のゆるい後の方小仙臺糞との小判を揮て重言小ホシイとを皆原

と矢の」とのゆるい後の方小仙臺糞との小判を揮て重言小ホシイとを皆原

江戸大坂通馬延宝八年印本

前々 附々 仁 羞 糞 夏を きのり

延寶のはよりかの大所様小書香板と俗の鳥とかりひくを調和の俗説とて



遊 蘭德齋の画の縁の与作との小繪草紙小 其の形を板めて彫たるもの 七十二番職人歌合の縁

三 酢の香板三種

酢を高く家の香板小三種の其一種ハ瓶の形を板めて彫たるもの 七十二番職人歌合の縁

小酢賣の傍小瓶をよまると是瓶を彫る器なり其形より出てあるものなり

香板あり 元禄元年印本 延訓往來繪抄 元禄三年印本 又一種ハ小竹とあそび

たるものありと今奥羽の街道又駿州府中ふわりと使す竹を編るものなり

のむ筆貫と酢と通 一例の隠はふくも古たりのやう小瓶とあそび

草紙と日よ 慶安四年印本 万間書秘傳抄 小八月瓶の名なり是瓶と造の佳

はくし曲物なり是ハ俳諧の勺小も日えと其圖とあはれて摸し出せり 高笑

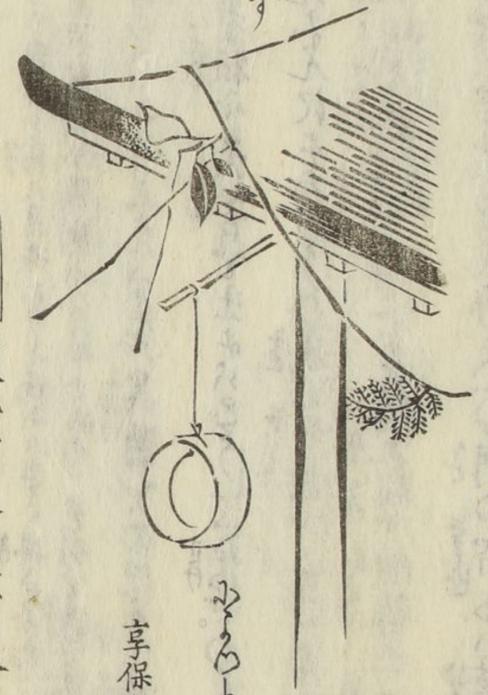
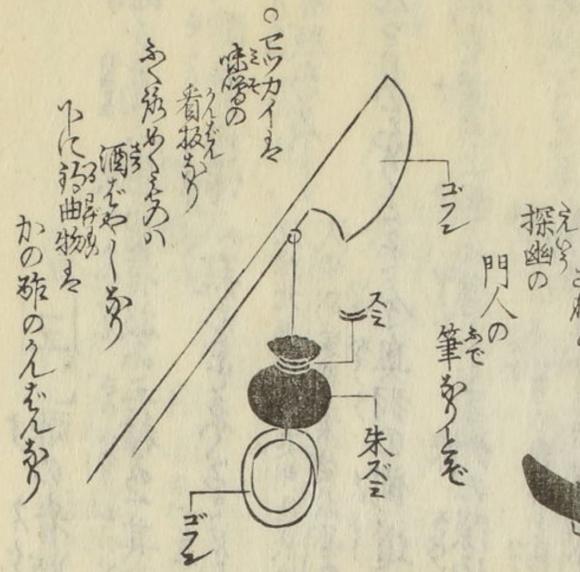
とあり享保 酒屋の香板小矢筈と出せり

元年 又支考が撰 本朝文鑑 享保二年 七の巻 九蚌が醋徳の頌

醋の香板小篩の底のぬけとあそび又六門の帘の性東の人の津やのらん

酌の香版乃圖

俳諧の書小を採らん
圖のふきも總す
○寛文の法画る小屏風
たのしみの圖あり
画人の名ありん
探幽の
門人の
筆のしとを



國の花室永元年印本非採びの巻

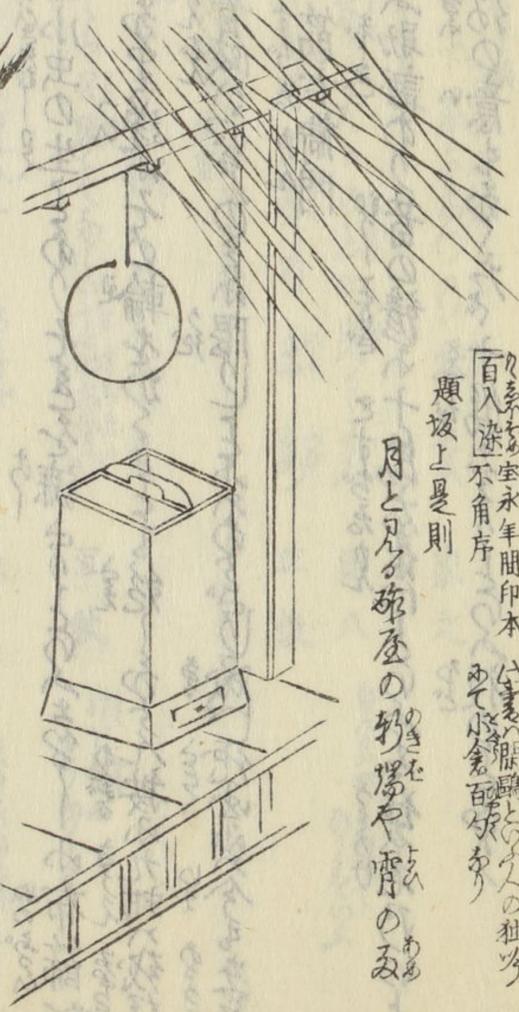
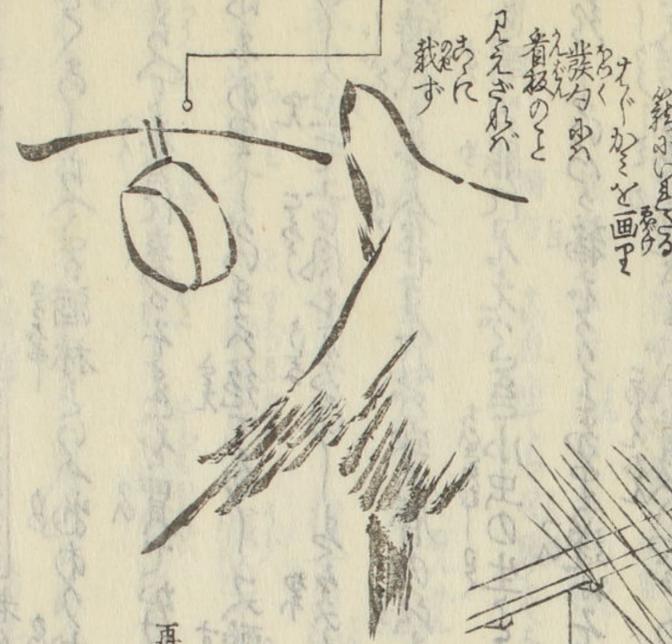
すきかきを瓶の香板と空法明 支考
○ゆる不際の小仙ありてはわらせく月と

三尺椽室永二年印本支考異

前々川松小然くすす時を漕まて 昌白
附々瓶の香板とあるぬがちたり 水甫
○はりの瓶のふきかきと採りぬかんのこと
まなかがとてと本朝文鑑 國の花と
もつ 撰者よてとらぬからこの
壺の上のわらせくさうふありとる

此圖享保十七年印本

俳諧會之衆小あり
○空の瓶の香板と
瓶のふきかきと採りぬかんのこと
まなかがとてと本朝文鑑 國の花と
もつ 撰者よてとらぬからこの
壺の上のわらせくさうふありとる



生身魂

瓶のふきと採るぬかんのこと
○空の瓶の香板と
瓶のふきかきと採りぬかんのこと
まなかがとてと本朝文鑑 國の花と
もつ 撰者よてとらぬからこの
壺の上のわらせくさうふありとる

再披ふ

俳諧世話書 兼應三年土佐國任皆虛撰
明曆二年印本一名世話燒草
附意拈菊のふきかきとる 酌屋の印とのこと
○香板のふきかきとる 美應のふきかき
百七十年のむくしとる

云「あや近く刀をえしるる」中古風俗志明和元年小日昔酒屋の杉の葉をて毬
 のぶくちうらへる酒林といふ物あり尤九月ある新酒のくち時分は田舎り
 ありらて薬に束さるるをを買てかけたさうし近年まで本郷のすま四ッ谷
 魚小舟のまゝ一がのまゝ絶てあり又酢の肴版小舟のきをさへおき一がのれも
 いはう止で古風を失の「まゝまゝ」といふ事を裁るふ前小拙出せ「生身
 魂の時代とを合せん」ハ寶曆のはまゝのわまゝ一肴板あぶるまゝと今知る人
 すくは醋少眼にんえさるる小虫の生とありそまを流しこのみさるゝ小布節と
 掛おれ一がのち編ちりよまのそ遂小その輪をかきとも絶たへん按小九餅ハ致は
 あり支考ハ弟彦とまは省版ハ江戸のさ小限り「まゝまゝ」ハ「ははは」今もま
 四 十筋右衛門
 物を弄るふ右衛門といふ助語わり昔の彦小十筋右衛門といふは彦をりいと
 すくおれとて右衛門といふの意もあまた十筋右衛門といふは彦といふ

新編大塚遺集 万治三年撰

西鶴大矢數延宝八年四月吟

前々 月々 夜々 ぎんりのふらぎんらん 源八 ぎんりのふらぎんらん
 附々 十筋右衛門が 遊乃 糸 正俊
 前々 ぬけ糸りふり糸もわらさるる 先
 附々 あれぬて公思もあはし十筋右衛門の 丑秋 糸と髪小

万治中の夕小足えしるる百六十余年前より此諺のまゝとありて
 三の巻小髪のもくあきをさるるむ女の泪小 髪小 髪小 髪小 髪小
 ありて地髪友も十筋右衛門の恨めさうに被まて云「又 丑大金 年印本
 ある老人もさるるふほより子供大勢はきて十筋右衛門のくちとらるる人々に腹立ちおのれ十
 一筋右衛門のくちとらるるをさうといふ」丑大金の予か此紙料を彫るる橋屋をたか
 扱めて 菱川師直 江戸の軽にふさあり 在合揃 元禄年間 小 糸の此六十とすはて七十に迫る

白髮の十筋（十筋）の云「あちちくは須の口えさる王徳中の印本（印本）俳諧江戸雀（俳諧）小
「むぐろや十筋あらんもまろげ」といふ夕（夕）と載（載）まほ百年の昔（昔）江戸ゆてもいひ
諺（諺）あふべし借（借）のを教（教）ふふお徳（徳）のとり助語（助語）を用（用）る例（例）をちくしを今（今）女児（女児）の
心（心）植（植）をほく喫（喫）た。ツるのんとあまニツるのんとあまるとうもたニツといふまで
ゆてあらんゆ何（何）の意（意）もあく十筋（十筋）を徳（徳）のあらんとかあぐ

貞享元年印本 西鶴二代男（西鶴）ふわまろ六筋（六筋）を徳（徳）のゆて」といふことを載
又「皮籠（皮籠）」元禄十三年印本

前夕略 三筋（三筋）を徳（徳）の味（味）小曲（小曲）より 金毛
足（足）を十筋（十筋）を徳（徳）のゆてを強（強）くいへんとその数（数）はあふべし五と八とを
大数（大数）のふひの三と十とを小數（小數）小用（小用）とて雅俗（雅俗）のふまろ

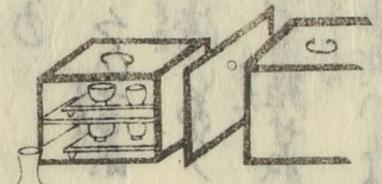
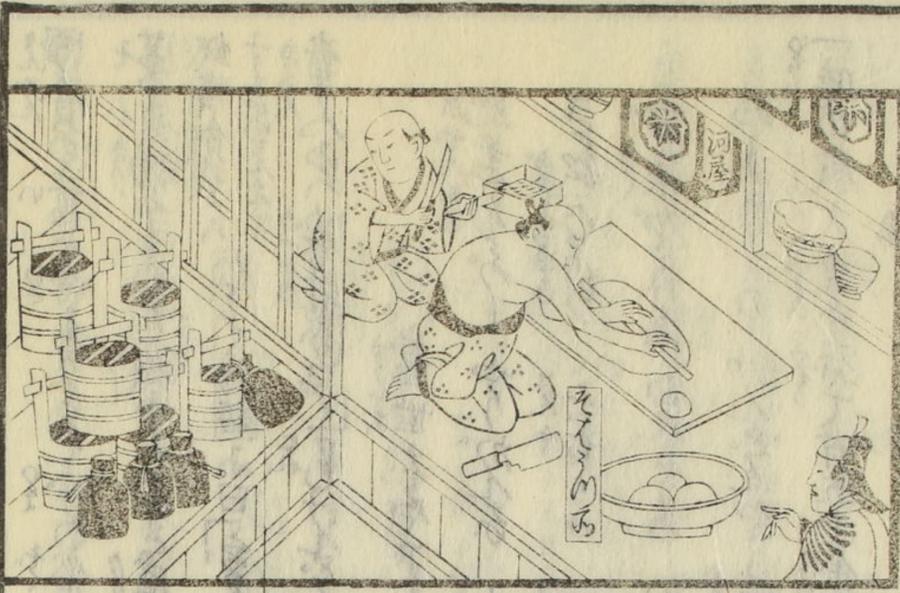
五 慳貪

因果經（因果經）といひ和讃（和讃）小云「人のゆとが。あぐを。けんといふあり。人おあぐとが
ゆと。どんといふけんどんと。あまろと。あまろと」といふ説（説）のゆとあぐ法華經（法華經）のゆと

慳貪（慳貪）の意（意）小當（小當）まろとぞ今の俗（俗）嘆（嘆）志（志）の強（強）まろゆと誤（誤）まあて慳貪（慳貪）を格（格）とて
著（著）ま切（切）のゆと飯（飯）ゆとゆと盛（盛）切（切）て出（出）かまろとまもあまろをけんといふあり
飯（飯）慳貪（慳貪）のゆと
貴人（貴人）ゆと食（食）者（者）云「是けんといふのゆと又寛文八年（寛文八年）のゆとゆと集（集）經（經）の
當世（當世）をまろまろの

肥（肥）まあぐ やりかえあ 人（人）のゆとふ 源（源）五（五）ま徳（徳）
き（き）あろり 二（二）まろ 河（河）徳（徳）のあり 大（大）明（明）非（非）
古（古）作（作）まほふ あんまあ いちも結（結）せぬ 親（親）世（世）ま喜（喜） 三（三）ま通（通）の 説（説）徳（徳）ま
ハ（ハ）文（文）りのの けんといふや 淺（淺）善（善）町（町）ハ（ハ）子（子）鐘（鐘）「以下江戸順礼（江戸順礼）の條（條）小抽出
一時（一時）の戲（戲）文（文）存（存）て百五十余年（百五十余年）の昔（昔）をゆとまろと
めんとあぐのまろといふゆとてうどんけんといふまろとまろとてうどんけんといふまろと
あぐといふや款（款）きりまろとてあぐといふまろとてうどんけんといふまろとまろとてうどんけんといふまろと

風と日と天と地との物はもうあつてゐるけれど前めりかき「むく物語小寛文四年」
切といふ物出まるとわき酒餠論も寛文中の印本ありむく物語小寛文四年はさき



上小摸酒餠論小寛文四年の図あり
温燗桶あり酒餠論の桶ありけり
後年繪小摸酒餠論の桶ありけり
前小屏風の者板を摸し寛文の図の
小屏風小摸酒餠論の桶ありけり
箱の蓋を摸りて裏のさき
今世の製小摸酒餠論の桶ありけり

伊諸芝香延宝年間印本
前小 津一ツ万氏を賞玩す 似春
附小 けんぜん蕎麦やん井のあり 挑青
是延宝中の吟多上の圖の棚小摸酒餠論の桶ありけり
江戸鹿子貞享四年印本
見小摸酒餠論の桶ありけり
同小摸酒餠論の桶ありけり
元禄二年の江戸鹿子貞享四年印本

○「江戸鹿子」小の一人を大「慥會」といふ鹿悪ある藤後ど〜又青貝のさき
人の知るさき小の一人を大「慥會」といふ鹿悪ある藤後ど〜又青貝のさき
冠附天神花

非諸花あり
前小 けんぜん蕎麦やん井のあり 挑青
附小 けんぜん蕎麦やん井のあり 挑青
雪凍

○「煎蕎麥切」かき口男
貞享元年頃「かき口男」
かき口男のちりりわき蕎麥切かき口男一杯六文かき口男むく物語切の根本とまむく小
下小摸酒餠論のさき
との小摸酒餠論のさき
貞享三年
五の巻蓮葉小摸酒餠論のさき
小摸酒餠論のさき
貞享三年
五の巻蓮葉小摸酒餠論のさき
小摸酒餠論のさき

下小摸酒餠論のさき
との小摸酒餠論のさき
貞享三年
五の巻蓮葉小摸酒餠論のさき
小摸酒餠論のさき

京都四條川原画巻

延寶天和頃の古画



梳屋の痛辨櫓木條の仕込毎出當
（元禄三年）
 兼當座のこ下小見を
 幸のゆて能のりるごご中間一人後務町のりゆて蒸籠む。そち切一膳七丈と
 一ひるごときは男後もせ死なまがまがうらぶらと入るりたをく四膳まで喰ひけるが
 やせでとらふ虫さきまのあつめををりけりかあうあ毒人ふくをせてもよれうと同ふ

鹿子
 元禄三年
 浅草
 印本

亭主が白ありのての看板ふむこそ物と書はけり虫ありてまらるるてはははは
ちのり代物へるまらるとのへ徳志のゆふそのきふが我らをか油虫小ちるて飯
摘意とゆふ話あり貞享元禄の法も蒸たるをぬる人多うりあべー今も麦
修文とゆふ話あり貞享元禄の法も蒸たるをぬる人多うりあべー今も麦
切を盛器小蒸籠を用ふるまらるる此餘波に

○慳貪飯 江戸鹿子 貞享四年 食見頻 金龍山 品川 かのりや月丸かろ子屋目出
と並へ出せり 金龍山の 又 西花万葉記 元禄十年 京三條繩子 茶屋慣食并当とゆふ
かあぐのゆふて他処へ持ゆふの名あべー

花千句 延宝三年 印本

前々 附々 慳貪の夜 遊 正立 季吟

の京師ゆてのゆふり 万葉記 及四條川原の画巻小わのせ見え 又 元禄曾我物語 元
十五年 六の巻 三谷通ひの路の夏といふ條小 ちかちち九屋 といふひまがそまのゆふ
印本 盃けんえあ茶の目けと云 按る小 江戸鹿子 小な良茶屋と別小出せけんえ版と

奈良茶と異あべるけんえといふの流行てあまの茶もそのゆふを負せあべ
吉國 正徳二年 近松作 といふ淨瑠璃節小 小半切のけんえ酒 といふもけんえの名を假て今

いふ居ぬのてを幾まて書るあり 貞享の 江戸鹿子 小見頻の字を當る見ぬ頻く
頻意あべー 是却て附會の説を延寶の草紙に慳貪と書る也 予ハ其説と取
江戸地 延宝七年 印本 言水撰

花あべの 江戸鹿子 調吟

○都風俗鑑 延宝九年 四條川原の少茶の古をゆふ條小 ちかちち九屋 といふひまがそまのゆふ
わけて或るちまといふ陰磨と名付 慳貪野良といふがはるあり といふを載又魂接

元禄年間印本 江戸依 小上ちま指まらう 玉神 かのり屋 空茶けんえ 小高まて云 といふありあべけんえ
とのへ端傾城ありといふ野良小もの遊女ゆふの品とてゆふを慳貪といふ古は彼
そまきり ちかちち九屋 遊里の地名もいびーといふ或草紙けんえの各女
より起すては蕎麥切小負せーと記し信と云 又 新歳師前 元禄十五年 熊谷女編 印本

三年 等々にけんん船との交わり新歳をほぬゆふの食類を高ん船の中より小使え女編笠
印本 等々にけんん船との交わり新歳をほぬゆふの食類を高ん船の中より小使え女編笠
あつた遊女のことからゆかり

再云 衣食住の記 筆記 小享保の比温飽蕎麥切菓子屋(流)船切のてとる
其後麴町へうんをあどるけんんや出粟蕎麥切ゆで紅が塗の桶の汁を佐利

小入て 流きこる 柳亭云享保の流きこる 其後享保が法神田をゆて二八郎屋けんんとの
看板と云ふ云 此筆記小享保のけんんや等々小の誤あれど二八郎蕎麥切乃

つらまるるるのるる 一冊子ゆかり云

六 玉川千之丞

玉川千之丞の兼應の流より寛文の流まで人小愛らるるかぶきの女方が京師乃
産ゆり寛文元年の流より高安通との流 又河内がひとかたに大流流行て同狂言
と云ふせりとぞ 野良虫 明暦年間 小田村山座 玉川の流面解花を難入き
ちりあ女より好このまると五中おれおとるまづ一年の齡廿日なる流月を

見る如くぬ野良の流も今少ゆて一とるる云 是京師の流野老文
三年 勘之郎座 玉河の流と云 女古今無類あり個者るるとやゆらん小とるる
あつて面白く今あけくもあねも過行の月のかりあねそ殊多るる
産記と云ふゆて 洛陽の昔かりのゆてあつてあどりの人多し 寛小野
道の元祖かりの母の人あつてゆてもとるる云 是江戸の流野老文
博時の流と云ふ條は 野良虫との流書小をあつてとるるの評とせり 中畧
寛文元年の流は 條川流にも若流かぶき女かぶきとるるをけけとるる 中畧 都のかぶき
崩して浪へあつる大坂社左衛門の流もいふ流なる 杵劫兵衛又九郎あつる千之丞と云
ゆてつらまるるる云と記して画中ゆを中村勘之郎が芝居の看板小太夫玉川
千之丞と云ふは 寛文元年の流ゆり証とせり

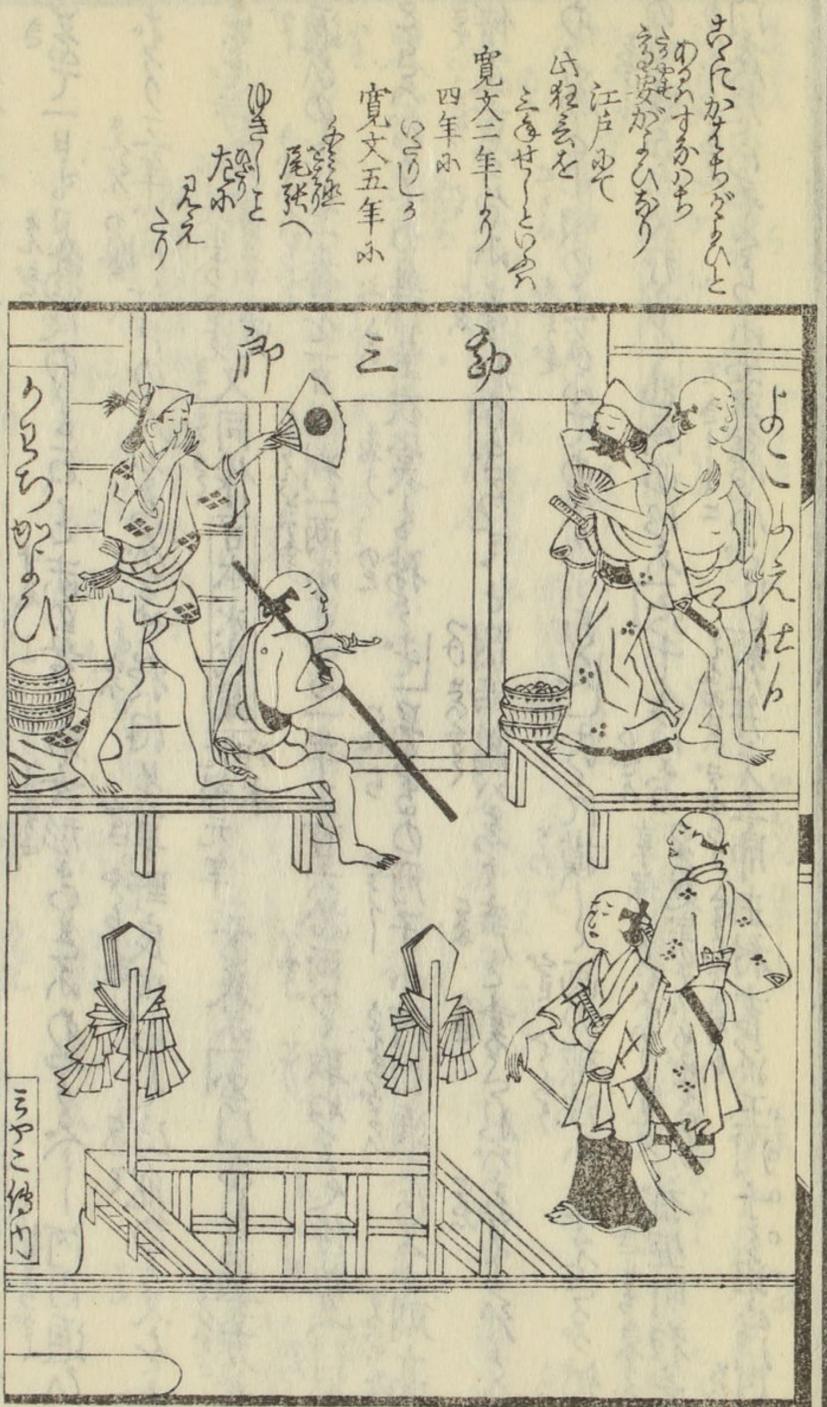
野老歌仙

前夕 月影にきては海をどよみの助 兼田
附夕 大車小せんのおとるる 玉河
志海の判の約り畧

按おすは寛かん文ぶん末すえののゆて彼からと坐が江え戸こゆて愛あれ一刺さの吟へ又百百今今役役者者物語
 延えん宝ほう六六年 小こ口く又又右右をを源げんたたるる女に方かの初とて畧りやく若若衆しゆかがさら磯いそとり尾お小こ舟ふね舟舟
 花はなの類ももあらうて香かのこままふ異あらまさそれもも相あ続つき流まもきよ江え戸この
 廿に九じゆうの時うらむ心王わう膳ぜんとて野や良らう若若衆しゆのあらまり云千せん之の炆のと先の上まもといひらり
 ころのあの夕ゆふ小こ船ふねの二編へんゆの此こ冊さつ子しと江戸この用取とゆて寛かん文ぶん延えん寶ほう中ちゆう抄せうの目録もく
 ながさ狂きやう言げんの繪本えほんありかあらまさらまがさらまのあらまるせとのあらまる安やすがらひの圖ずわり
 すれにあらまりゆて出せし

花はな洛らく六む百ひゃく夕ゆふ延えん宝ほう八はち年ねん印いん本ほん
 羨うらやま夕ゆふ 友とも静しずか
 友とも吉きち
 友とも吉きち
 友とも吉きち

剗くわ野の老らう 小こ口く又又右右をを源げんたたるる 塚つた町ちゆうの圖
 奥おく書しよ寛かん文ぶん式しき天てん中ちゆう甚しん吉きち日にち 返かへ油あぶら町ちゆう
 まますす屋や屏びん板ばん



尾お陽やう戲ぎ場ばう事じ始し 天明ていめい二に年ねん 小こ口く又又右右「寛文ぶん五ご年ねん乙おつ巳の秋あき橋はし町ちゆう重じゆう町ちゆうゆて狂きやう言げん抄せうの目録もくをあらまりゆて出せし
 友とも静しずか 友とも吉きち

西鶴大鑑貞享四年 五の巻小云 七玉川のつる小鳥の名をふくむと云む。凡そ其

はるるをうつて涙の出して家科の所簾とわけての面影実の女并鳥も何とて

是れゆらまはるるべき十代の妻よりも都の舞臺と云るは十二の大厄まで振被

ぎて一日も入らぬにわらぬと末の母の若女形もよふわらふべし河内通ひの狂言

なると二年が間江戸の人をわびせ終ほめ草野良虫もよはぬの古文をわびせ

虫云 野良虫あふええ 又同作 日本永代藏 元禄元年 二の巻小玉川のつる女方しては

通ひの狂言一番を一日小判一兩小さる一年三百六拾兩取ぬるを仔細引くは

こころむらゝの舞臺衣裳も洗はぬ 是等の冊子小河内通ひのふか則高安通ひ

借友吉がふ小まきかゝらんとて附西鶴のあゝ声と書きぬがまきと云ふは

わらぬと小唄のよみゆてわらぬ あはれ摸く画の標注小又えと云ふは

の唱歌あり又野々く物後ゆらふ 六千のゆらふ 享保よりゆらふ寛文 祿宜軒程云々

門たたむらやぐらふ小まきかゝらんとて附西鶴のあゝ声と書きぬがまきと云ふは

主膳あま等も祿宜軒ゆてかゝらんとて是男拍子と云ふは

家合をて加賀節との歌をうゝひはととのひ夏ありはる安通ひの小唄のか

加賀の節ゆてうゝひはととのひ夏ありはる安通ひの小唄のか

又案ずる小 吉原讃朝記 寛文七年 花女を評して「玉川千と並小他」と

いとよはれも心をほけてうゝ小千と下りのあわづて他はくべと答て曰

今の千と並ゆらふも他はあゝあゝと並が若くもさる」と云ふ似たり」とあり是ハ遊女の

ことをいへるは寛文七年のほ千之丞がや表証と云へて○こゝも是没年定めて

俳諧武藏曲 千春撰 季吟序

前々 吟を 善を 善を 善を 千と並 一品

附夕 待ケバ 秋風

是天和二年の印本也あゝあゝと並い没しと云ふ此吟の吉野の花女の 貞享元年印本

野良三座託小玉河千と並と評して「わらぬと云ふは」との人名せつと云ふの名人あらん

と云ふは野良三座託小玉河千と並と評して「わらぬと云ふは」との人名せつと云ふの名人あらん

ふさうらんつし... 通油町本問屋開板

延寶六年清め日 通油町本問屋開板

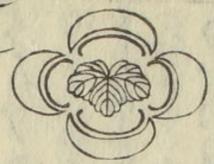
役者物語の興書... 延寶六年今文政八年...

野良虫 剝野良の二本と

千文燕の綴り...

俳諧雜巾 延寶九年印本 常矩撰

此句も千文燕主膳...



○近年刊行あり... 冊子小天和元年...

七 柴垣

明曆の盛ふふあり... 柴垣といふ小唄あり... 此項北國下部の采擗唄と...

東海道名所記

時花きこり 寛文の著流の流く 秘多のいせとて 是もがそりいねと年よりし 侍る
さても母も慶のいそを今あひ合せ 宗恒 踊りまわつてうと 殆くも小書ゆも 知らぬ
と申せ何をいうてもあまのぢやのいふ云 又云千風か 行脚文集 一の巻 加州金澤の
文小 燕樂の加賀節もは 附あそりのひで 悲哀の 宗恒 早歌を遠く 廢して 吟人
あれたる 一は 天和三年の書る文あり 二代男 小合を考あふよりの山嶺をわ
天和の比 廢すこと必せり

俳諧夕兄弟 元禄七年印本 其角撰

前夕略 宗恒 けいも 巻乃 神叔

獨鈷鎌論 宝永中印本 小 正保元年著 小琴のこととての條 小 匠ぞの比より 筑紫樂と
とやいふ 百年の昔といふ 廢すこと 是等の 冊子を目して 知るべし
因云 小 匠ぞの比より 筑紫樂と 同二年刊 小琴のこととての條 小 匠ぞの比より 筑紫樂と
いふこと 和のいふこと 是等の 冊子を目して 知るべし 中界

筑紫やうやも樂もまのてすやさか少くはかううん小 小のさのさるさ
とどろあとのされてひたすまをれが琴の乃とすややすささたるやうふあんわり
くろ云とんえあふ引用せ 舞正語磨 治小 岡ざを 拍とあまあうと
岡崎も 踊唄めてのまゝあぶ 一友人の曰今の踊は六拍子と云ふが是
則 是のいふやうあり 予按むるに 岡崎の只拍子と要と 一宗恒は拍子を
要とするに 拍と云ふは 岡崎に正保のさるは 元禄のさるは 寛永
前の拍也 元禄す

八 江戸酸漿

案内者 寛文二年印本 四の巻 七月七日 東西本願寺の花 東西とて小對面所の
簪小 造物籠小 さま 桔梗とてあふ 一男 弟花 松翁花 蓮花 竹葉 百合
花とて 百目紅花 杉の葉 莎荷 射干 草等 をのりて 是も 年々 綴はく
みろ鳥獸を 作りのいほなるを 江戸酸漿子とて 七月 ぬ色のあはれとて 出

江戸酸漿

しつと緑色の物とせ」といふ夏あり寛文の初めをきよとのふけ江戸にけき
万治のころよりわきわき **俳諧毛吹草** 寛永十一年撰の季寄八月の條に鬼灯と云ふ

とあり **案内者**のいふまゝのころと見ゆ七月小色はく鬼灯も万治前あり

江戸新道 延宝六年印本 言水撰

聖乃ふみやすをに吹くん **吹く鬼灯** 心色

柳亭云はる **江戸廣小路** 中々上の五文字ありある風とあり

洛陽集 延宝八年印本 自悦撰

R ね乃かひやふん **江戸鬼灯** 琴風

江戸にけきころのうはうき **吹く鬼灯** 口紅とさうなるひきあはせ

空林風葉 天和三年印本 自悦撰

女奴 **吹く鬼灯** や色ぶの **山川**

洛陽集 空林風葉の二本と京師の俳書あり 好問堂藏

いま丹波鬼灯の名をいひて江戸鬼灯の名をいはず今六月より色はき
たる鬼灯のふ是則江戸鬼灯をいはず江戸鬼灯を絶て丹波の國の種

をりと多くて極まるを **松**

九 稻荷岡附 小砂より

松の葉 小載る **月見** といふ小唄 **かちでやれ** 尻ヲ **をり通ひ** しらべ

小石取 池 **さうさういひのあか** 片枝枯 **かえり** 皂荚 **もやもく** 意 **にやせ** 其方

い **ちむ** 異 **さ** 稲荷 **の岡** 小 **の** と **も** 君 **を** お **り** バノウ **手** 編 **笠** と **て** の **松** を **り**

ゆ **え** の **云** 柳亭云か **編** 笠 **を** く **も** お **り** の **か** ぬ **り** と **の** を **按** む **る** ふ **北** 菱 **川** の **絵** 本 **及** 古 **瓦**

画 **巻** と **り** る **小** 吉 **通** ひ **の** る **弘** 願 **山** 專 **稱** 院 **の** う **の** 土 **ふ** 小 **坂** を **り** **弘** 願 **山** **乃**

雲 **に** 合 **力** 稻 **荷** **の** 社 **わ** り **そ** の **う** あ **る** **ゆ** え **小** **稻** **荷** **の** **岡** **と** **い** **ひ** **あ** **る** 松の葉元禄十六年の印本あり

續誰が家 宝永七年印本 百里撰

前々 **う** **ら** **う** **さ** **笠** **の** **糸** **を** **か** **き** **り** **拾** **翠**

附々 **粉** **白** **た** **稻** **荷** **の** **岡** **小** **稻** **壺** **浦** **濟** **通**

○ **銅** **壺** **浦** **と** **泥** **町** **の** **茶** **屋** **の** **さ** **ま** **を** **い** **ひ** **煙** **の** **ま** **の** **か** **る** **風** **情** **を** **彩** **白** **花** **と**
は **く** **り** **は** **な** **の** **夕** **あ** **る** **べ** **ー**

菱川の繪本延宝六年小「金龍山待乳山なり」あはてするよりおきてやまをあら

えりんをどほろひかせろく処あり」又「松の葉の」富土まうで」といふ小唄小「かひ

とたひて仏ゆふふさ。去るのさうてのりやゑのたつ「佛ぢやまの」仏もたのまを

日々よんちやがらひのやむ助が約とさるをてのりやさうやえんさうあひりや

おそゆえさうて去るのきりよめんバならやまといひおきて。さ。ををりうほひで

熱うちかくし「とりの」江戸名所記寛文二年印本 小大門までさうてうう画わりの

わりの土手を馬ゆてめさまを画きさるるも元あれどあわくも此稻荷の岡といひ

さの海小てさうりあましと尾等寺の冊子小合て考あべ」又吉原よりりる者も

次小摸一丈古画小「誰袖の海」印本 小日本堤の呼次番屋さう大さる星わど

わりて辻東と送る拍子木の音もさるゑさるにかうひらる公の岡小異井の救の

うち道鉄の寺のあふはさぎとめりかりありの救籠あき財よりいんおとり

なまてゆえせぬ戀の重荷をのせてよつら来る馬があはれも勇ぞし「云」の作者

由之軒とのひて京の人より元禄年間ゆへへ 元禄のたなる籠ゆてかうみ若多くかう尻る

来りる入扉アとのゆふの草紙と印行せ のおとろへしゆ多なる籠ゆてかうみ若多くかう尻る

とゆふと前小引し冊子小合す

○お小引し小唄「月見」小破さるる池のあかぬ」とのひ又「裏甲」印本 小「砂利

取池ふ若の園面あか免まて衣紋坂を中大門「ひる」とわりのまの砂利場ハ

小砂とり坊ありまてはむをさる今小石多し寶水のたまを小砂とえ

しわこの池のどくゆてのやしあべし

俳諧其柱 其角十七回忌追善 享保八年印本 貞佐撰

前夕 足踏で 四方六千ぬちんをき 蓮文
附夕 砂利路 控て 今乃 一婆婆 貞佐

享保のたを破利とり坊のまのどく盤花の地とありしゆえふは夕をまうけあえ

いま彼地の何まがな小池のを尾小破とさるし跡のかさるう残アしありとぞ

天和の法乃三画卷此圖の稲荷の岡と云
 此の所の稲荷をのり

元圖

此の額をかりて
 紙中せまて委す
 下小引をてて専稱院のまの道哲を

大勢の赤落のまのり
 山廻りかたをててる皂夾といふまのり

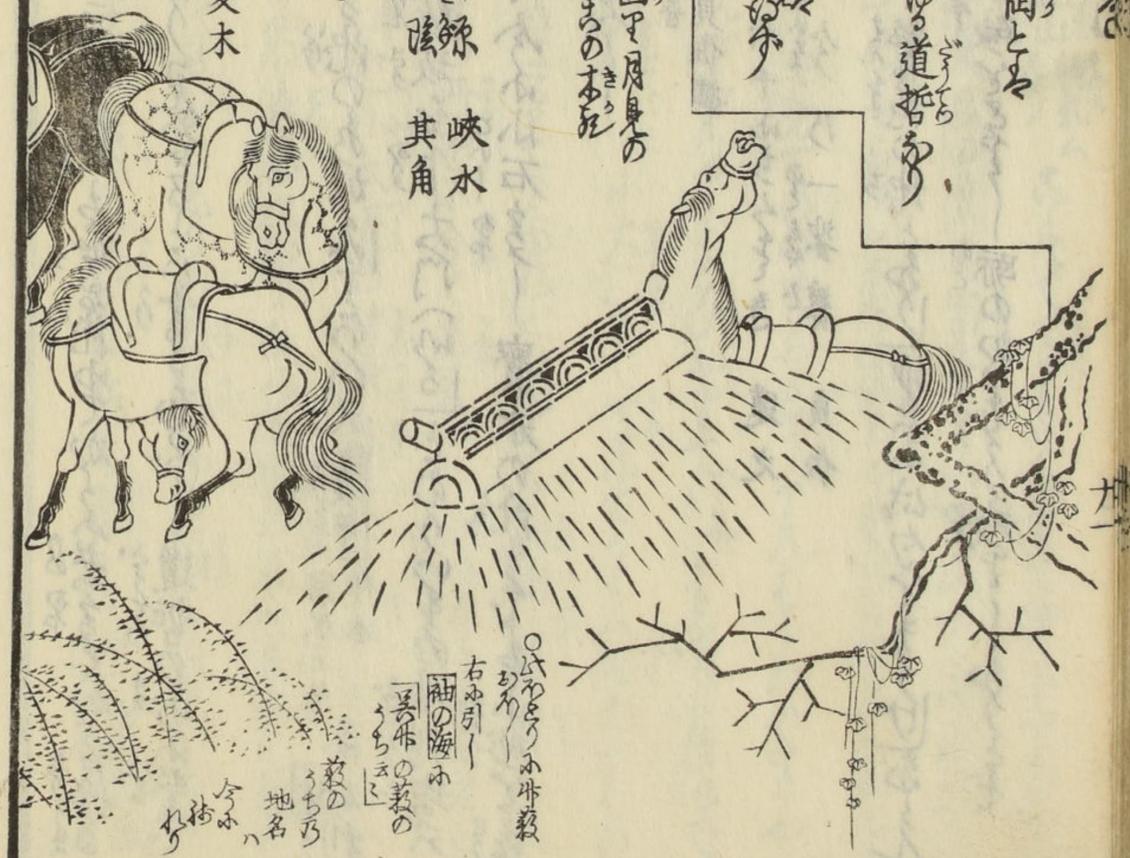
武藏曲 天和三年印本 千春撰

前 法寺舟耳小抄るよう録
 附 ありてをてるや法寺えん撥強

映水 其角

受番 延宝年間印本 似春撰

前 かつ尻を差殿をさされろろ録不 夏木
 附 かつろわげをを本陸の月 似春
 又 雲をわてて録日かやく
 幕をうてせ 夏木



右小引
 袖の海
 異作の装の
 うらまに
 地名
 今ふ
 かし

同書漢和

血氣さうんふすその洪 似春
 輕殿 總先陣 靜軒

「ようや被たてんハ川ハ
 かの なるくエハ小傍 似春
 今

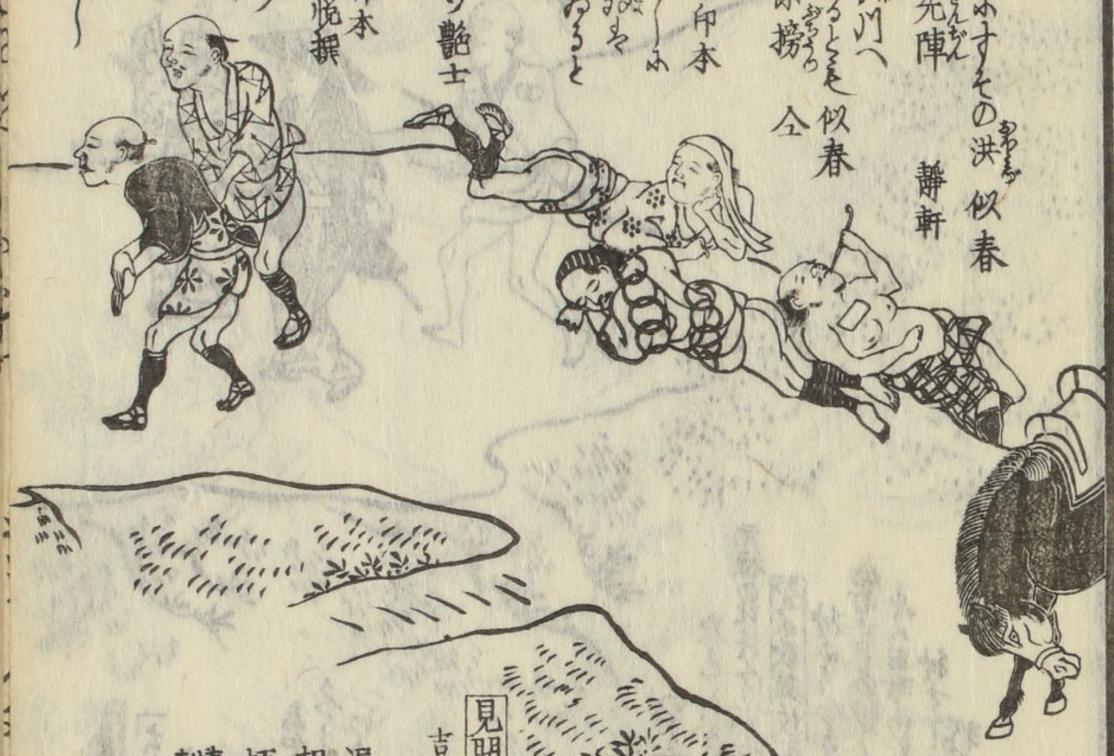
水比羅目 元禄十年印本

鏡の人のあはれむ
 鏡の人のあはれむ
 鏡の人のあはれむ
 鏡の人のあはれむ

牽續け 艶士

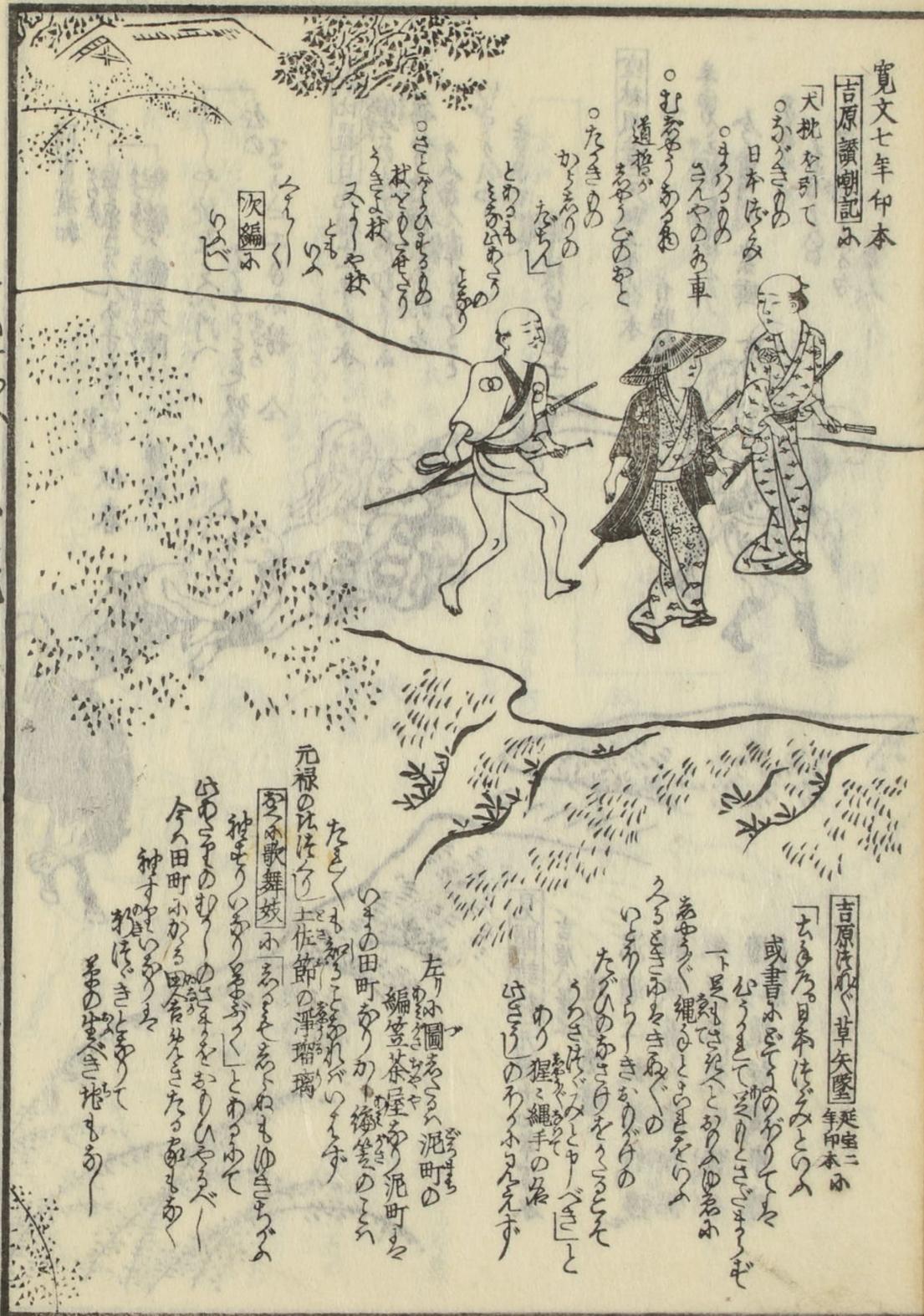
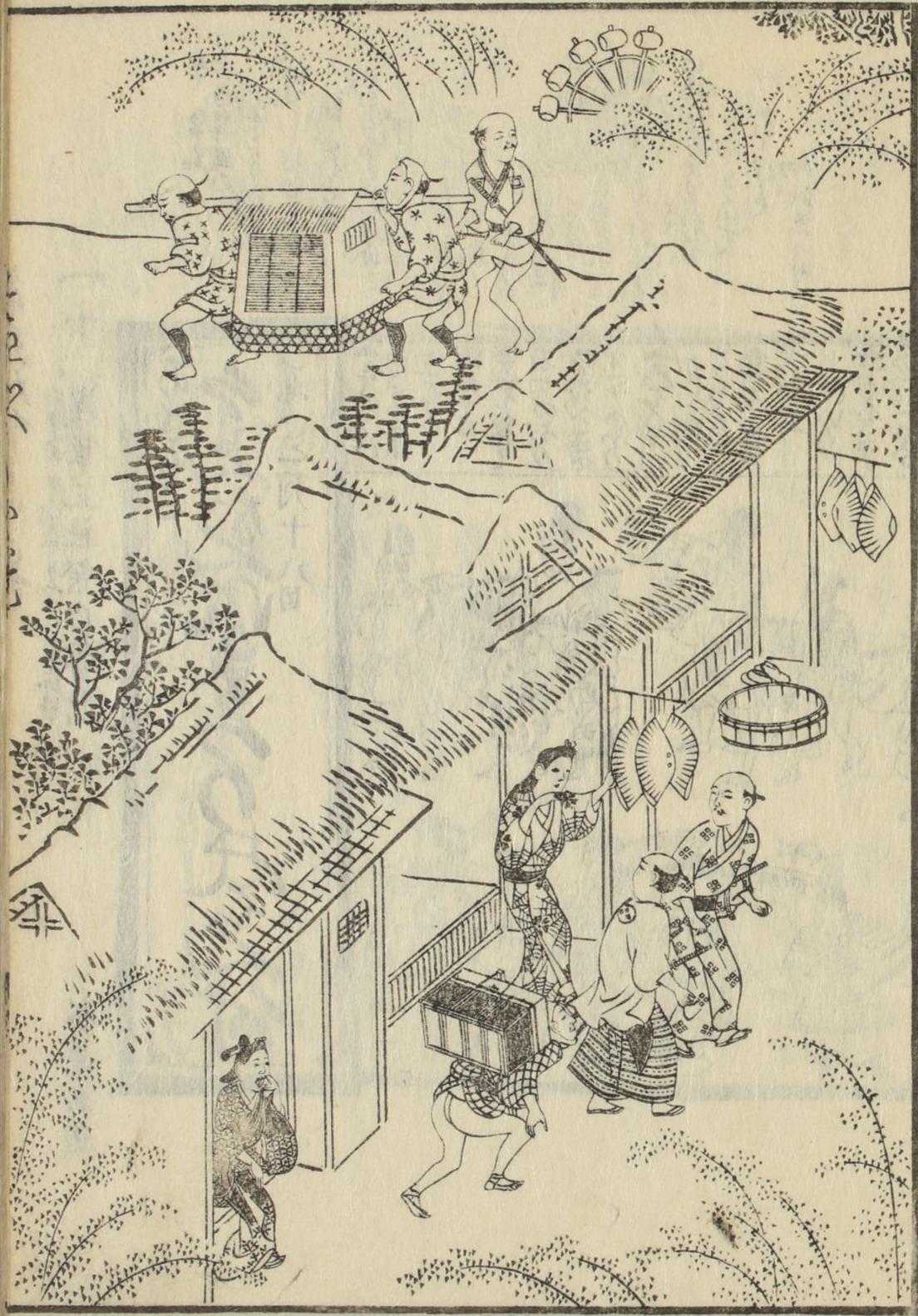
空林風葉 天和三年印本 自悦撰

七夕
 牛男之答 素雲
 今宵川 素雲
 早の半で
 之答をての
 了小比 なる白
 あふ



見聞詩林 元禄十七年写本

吉原八景
 道哲晚鐘
 泥湖二挺擲行 遅
 相共 忍入 姿 惚 力 運
 坂至 衣 紋 心 博 々
 情 亡 道 哲 撞 申 時



寛文七年仲本
吉原讀朝記

犬批を引て
○ふがきのの
日本は
○まわりの
○まんのあ車
○むちやうあるあ
道格が
○たききの
かききの
とわきの
○たききの
○たききの
○たききの

次編

せりか
一
下
巻

吉原はやく草矢墜 延宝二
年仲本

「吉原はやく草矢墜」のありて
或書かぬてふのありて
公らしてはやくとてふ
下はやくとてふのありて
あやうく繩のありて
うらまはやくとてふ
たきのありて
うらまはやくとてふ
のり繩手のありて
はやくのありて

元禄のはやく
土佐節の淨瑠璃

左の田舎のありて
編笠茶屋のありて
今田町のありて
神守のありて
あやうく繩のありて
うらまはやくとてふ
たきのありて
うらまはやくとてふ
のり繩手のありて
はやくのありて

浅草三社祭の番附

十

浅草三社祭の番附

松蘿館藏

浅草三社祭の番附
三月十八日

○古き屏風の
惜へ一年号と
開されども
延寶天和貞享
當時の物あり
○三社権現の祭りと
俗に
ゆかぬその俗に
あつて
如此ありせり

三社権現の祭りと
俗に
ゆかぬその俗に
あつて
如此ありせり



九三

○母衣武者の
神事のあり

寶曆十一年印本
花巻談小神事の
町家の権現日傘
後園まのり後抄
又浮世袋といふ
又安永八年印本
前々附自在賣
筆はあふ初巻の
といふを裁

五れり
六れり
とみり
あつて
りあり
十七ん
大あり
十ん
あつて
十二ん
十三ん
十四ん
十五ん
十六ん
十七ん
十八ん
十九ん
二十ん
二十一ん
二十二ん
二十三ん
二十四ん
二十五ん
二十六ん
二十七ん
二十八ん
二十九ん
三十ん

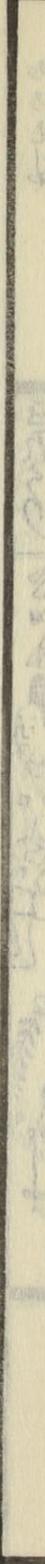


七九

十一 煙草の二服一錢

むく煙草を二服一錢ゆて巻くことわり
八水隨筆 小云「煙草のつゆまき」
 ろくくの書小まきく小記して日えり予が父弱年の比大坂高麗橋ゆて唐人の装束を穿る商人舟のきせるゆて二服一錢はたて人小の手をさるうう小記りぬ
 此話いと後法よりこの書の作者姓名を詳かざれど江戸の士ゆて享保元文中を經るると巻中小日えりその父の弱年の比といふも承應明曆のころの事なり
 わらん

還魂紙料下之卷 畢



此書稿を脱したるも文政甲申の春より今刻ありて再考せらる
 説のうへ引をけし事いと多し其二三を左小録す

上卷 五 安阿孫の條

安阿孫にかさるる古き佛匠の名とかりてゆきの説教小まきと
 ことわり江戸咄小運慶甚慶の名のこゝに説小あはれ哉り
元禄六 雨夜
 三孟機機小上村并舟といふかき治郎と説せしゆ上作定朝平甚慶
 村々町々開帳盛とほまより定朝と後一糸院の御宇の佛師と
 日坂本大文小住せしあはれ大文と号すこと入倫訓蒙圖彙小わり

五 雛の轆の條

柳樽五編 明和七年印本 川柳点

轆でわげろが娘氣よのうす

○雛の扱ふき紙娘の氣にとらるるわおのづる白きり

延寶四年梅盛が著 類船集 小 山茨菰 むらさき いろのやまはらわを

江戸 破れあとして 美しく せむし せむし せむし せむし せむし せむし

せむし せむし せむし せむし せむし せむし せむし せむし せむし せむし

せむし せむし せむし せむし せむし せむし せむし せむし せむし せむし

せむし せむし せむし せむし せむし せむし せむし せむし せむし せむし

江戸

柳亭主人種彦著



浄書 千形仲道

刷人 朝倉吉次郎

柳亭主人著近刊書目録

○還魂紙料二編 二冊

○ぬれえ結 三冊 は冊子も還魂紙料のたひは種とかく 俗とあくしるることごとくは流しに流す

○俳諧古道具編 三冊 は冊子のたひは種とかく 俗とあくしるることごとくは流しに流す

美艶仙女 江戸 美艶仙女 板本氏製

文政九年丙戌冬十二月發行

京都書林 堀川通佛光寺下町 植村藤右衛門

大坂書林 心齋橋筋唐物町 河内屋太助

江戸書林 通油町 鶴屋喜右衛門

馬喰町貳丁目 西村屋與八

